

続かぬ恋

smallfox

6月。忘れかけていた夏独特のあの湿気を、また思い出す季節。

スーツのズボンが、空気中の湿気と身体から沁み出す汗で、重苦しくふやけ、折り目を失ってしまう季節。

昼、屋外に出ると、いやな湿気だけでなく、夏本番と変わらない強烈な日差しも襲いかかる。

人は、夏に歳を取るのではないか。

織戸啓介は、もたれかかるように、自販機から冷えた缶コーヒーを取り出し、そんなことを思った。

少なくとも、主観的には、そうだ。自分が、こんな短い距離を歩いただけで、へこたれてしまい、飲めば余計汗が出るのが分かっているのに、自販機にコインを投入してしまうのは、それだけ老いたということだろう。寒い季節に薄らと自覚させられた身体のガタを嫌という程思い知らされ、自分の老いを認めざるを得なくなる。啓介の年齢には、夏は、屈辱的な季節だった。

それにしても、今日も、また、下らない一日だ。このところ、啓介は、毎日同じ感想しか持たなくなった。出世を目の前にして、世界的な経済危機に見舞われ、予定されていた順番が狂った。いや、ほころびは、その前にもあった。北関東の営業所を任せた部下が、ライバル会社に引き抜かれ、そのことで部長から叱責を受けていた時に、妻からのケータイが鳴った。いささか投げやりになって、部長の気を制して電話に出ると、取り乱して、高2の次女が化粧品を万引きしたと、妻は言った。信じていたのに、と、既に悲劇のヒロインになりかかって涙声の妻へ、啓介は、5分後に折り返すと、冷たく言って、回線を切った。しかし、結局折り返したのは4時間後だった。その間に、あらかたのことは起こり、そして、終わっていた。どこで知り合ったのか、妻は、やけに健康的で世事に慣れた風の男を電話に出した。

「ケーサツの方は終わりました。結構、ややこしかったですけど、何とかしました。俺も、昔、悪かったんで。」と男は言った。

「それは、どうも。」啓介は、その「俺も昔悪かったんで」男が、何者かも分からず、自分がそう言わなければならない理由も腑に落ちず、しかし、丁寧に礼を言った。

その後も、「悪かったんで」男は、要領を得ない話を、脈絡もなくだらだら話した。「生活安全課の耕助さんなんて、これは普段だったら見過ごさないケースだって言ってたんです。しかも、頼子ちゃんが、ずっとうつむいて何も言わないもんだから、キレそうになっちゃって」とか、「俺、奥さんに、頼子ちゃんの成績表を取ってこさせたんです。こういう時は、身内があれこれ言うより、第三者の目が信頼されるって、俺、知ってるから」とか、「悪かったんで」男は、警察豆知識を披露しながら、恩着せがましく、話し続けた。

啓介は、その間も、気のない相づちを打ちながら、子供がいると、こうだ、と考えていた。子供から派生して、自分の人間関係が不用意に広がってしまう。学校で、世間知らずの担任や、自信なさげの校長を見ているだけでも疲れるのに、今話している得体の知れない「悪かったんで」男のような、電車で見たら席を立てても離れたくない人物と、話さなければならなくなる。子供は、そういった拷問からの脱出を阻止する人質だ。子供さえいなければ、「悪かったんで」男など、クラムチャウダーのスープに入れて、煮立ててしまうだろうに。

他方、子供自体との関係は、啓介にとって、実は愉快だった。頼子は、小さな時、啓介に、金の象が欲しい、と言った。お寺の経営する仏教幼稚園に通ったせいで、当時、頼子は、お釈迦様を崇拝していた。そして、お釈迦様の乗った金色の象は、頼子の憧れの対象だった。

「パパ、うちで飼おうよ、金色の象。私、お釈迦様みたいに、金の象に、乗ってみたい。」

「頼子、ごめん、金色の象は、お話の中にしかないんだよ。」

「えっ」と、当時の頼子は素直に驚いた。啓介は、そんな純粋な頼子には、少し単刀直入な父だったのかもしれない。

「じゃあ、ピンクでもいいわ。」

「ピンクの象もない。実をいうと、象っていうのは、大抵は、色気のない灰色か褐色なんだ。」

「色気って何、パパ？」

「ごめん。パパは変なことを口走ったかもしれない。この際、色気はどうでもいいんだ。ただ、象はいるってことさ、金色やピンクではないけど、象はいる。」

「そうよ、私見たことある、動物園やプーケットで。」

確かに、その前年、家族でプーケットに行った。あの頃は、とにかく、前途洋々というか、家族がまだ疲れていなかった。あれが、家族で最後に行く海外旅行となるなんて、当時は考えてもいなかった。そして、頼子が、象にあこがれたのは、あのモンスーン気候の街を、ゆっくり歩く小柄な象を何頭か見たためかもしれない。

「そう、象はいる。でも、いる象でも、飼えないんだよ、うちでは。」

「どうして？犬は飼えるのに。」

「いや、うちはマンションで、犬も飼えないんだ。でも、マンションを出れば、犬は飼えるかもしれない。しかし、象を飼うには、マンションよりもっともっと沢山のものから、出て行かないと駄目だと思う。そして、それは、今のパパや頼子にはできないと思うよ。だから、象は飼えないんだ。ごめんな、頼子。」

「そうか、じゃあ、本で読むから、いいわ。」そう言って、頼子は、お釈迦様の乗った金の象の別の本を探し始めた。

※ ※

万引きの日の夜、啓介は、家に帰って頼子の部屋に行った。

「頼子、パパが、昔、象は飼えないって言ったの、覚えている？」

頼子は、啓介の方を見ながら、クスリと笑って、うなづいた。頼子は、啓介と、未だに仲が良い。

「でも、象は買えないけど、化粧品なら買えると思う。どうして、パパに言わなかった？」

「そうね、パパに言うべきだったかもね。でも、パパは、金の化粧品は買えないでしょう？それに」

「それに？」

「象を手に入れる為に出て行く必要があるものと同じじゃないにしても、何かから出て行きたかったんだと思うわ、高校2年生の女の子なんだから。」

「なるほど、それは、このマンションに戻らない覚悟で犬を飼うことができなかった我が家のこと？つまり、我が家から出て行くってことかな？」

「そうかもしれない。」

「そうでないかもしれない。」

「そうね。それに、結局出て行かなかったから。」

「戻された？」

「そう、完全に戻された。高校2年生の女の子には、相当不愉快な方法で、無理矢理戻されたわ。」

「でも、君に万引きされたお店も、不愉快だったと思うよ。」

啓介がそう言った途端、頼子は突然苛立ったように早口になり、啓介を非難するように、言った。

「そうね、でも、これはお話でしょう？パパが主役の恋愛小説。だから、いいのよ。お店なんてないし、取った化粧品も、実はないのよ。そうじゃなければ、パパはこれからも恋愛をしないで、そういった下らないお説教を垂れるだけの下らない中年男のままよ。それに、それどころか、私も、ここで消えるのよ。」

「えっ。じゃあ、『悪かったんで』男は？」

「知らない、そんな人。田尻さんのこと？あの方は、消えて欲しいね。私も同意するわ。」

※ ※

そして、とにかく、織戸啓介は、6月の暑さに辟易していた。

ようやく辿り着いた客先の公立病院は、駅前の怪しげな風俗店街を抜けたところにあった。疲れた背広姿の啓介にでも、店の客引きが声をかけてきたが、熱心さはなかった。分別盛りを過ぎた中年のサラリーマンが、昼過ぎから誘いに乗る確率が低いのは、彼らも知っているのだろう。

そういえば、ある小説家が、自分はそういった店で金で女性を相手にしたことはないと言っているのを雑誌か何かで読んだことがある。啓介の身近にも、そういった人間は少なからずいる。しかし、啓介は、それ程、厳格に自分を律してこなかった。若い頃は、友人に誘われて、そういった店で、性的な欲求を処理したことも何度かあった。しかし、それも遠い昔だ。啓介には、今は、そういったことすら、ただ面倒だった。欲求が高まることがないわけではないが、20代の頃のようにいつまでも続くことはなく、時間が経てば、潮が引くように、自然に消えていった。妻の腰に手をかけても、彼女が拒絶したら、何事もなかったようにテレビを見続けることができた。

それにしても、金で女性を相手にしないとやっている連中は、金を払う女性と払わない女性とで、なにがしかの区別をしているのだろうか。啓介の多くない経験では、金を払おうと払わなかつと、女性はそれほど変わらなかった。イヤな人物もいれば、好感の持てる人物もいる。確かに、金を払わない関係で逢えたらよかったと感じる女性もいた。しかし、そういった疑似恋愛的な感情を抱かせる女性の方が、よりプロなのかもしれない。また、たしかに、金を払う場合、最初に話をするきっかけを横着に省いてしまう。しかし、それは、プロセスの問題で、彼女たちの問題ではないような気がする。

啓介は、人と会話をするのが得意ではない。その上、酒を飲まないから、会社の仲間とスナックやキャバクラに行っても殆どホステスと話をしなかった。じっと、黙って、会話の成り行きを聞いていることが多かった。そうすると、幽体離脱して、天井に近いところで、皆を見下ろしているような気分になった。何をやっているんだろう、俺を含めて、この連中は、と。

先日、テレビで、殆ど話をしない理容師が人を殺す映画がかかっていた。その映画の監督の作品には、大抵、ほとんど話をしない人物が登場する。おそらく、多くの聴衆から違和感を持たれるだろうそういった人物に、啓介はシンパシーを抱いた。そんな啓介だから、機関銃のように話すスナックのホステスより、どちらかというとな静かな、金を払う風俗の女の方が落ち着くことも少なくなかった。

いずれにせよ、そういった歓楽の世界のことは、もう10年以上前から、啓介とは関係のないものになっていた。

※ ※

公立病院の医長は、「検討しますよ。」とだけ言った。啓介も、その医師には、食い下がれば下がるほど逆効果なのは分かっていたので、会社のブロッシャーだけ置いて、医長室を辞した。外来時間が終わって、小さなLEDランプだけ点灯している廊下を、啓介は一人歩いた。